

オードリー・スミス副学長と高橋温子先生への スミス・カレッジについてのインタビュー調査 —調査目的と手続き—

Interviews on Smith College as a Women's College
with Ms. Smith & Ms. Takahashi : Its Purposes and Procedures

安東 由則*

ANDO, Yoshinori

目次

1. インタビュー調査の目的と経緯
 2. スミス・カレッジについて
 3. 実施手続きと対象者
 4. 本報告の作成手続き
- 引用・参考文献

* 武庫川女子大学文学部教育学科・教授／教育研究所・研究員

はじめに：インタビュー実施の経緯とスミス・カレッジについて

1. インタビュー調査の目的と経緯

著者は、2015年から2018年の予定で、科学研究費研究（基盤C）「女子大学の存立意義に関する比較研究：日本・アメリカ・韓国の比較研究」（15K04327）に取り組んでおり、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）、韓国にある女子大学を訪問して関係者にインタビューを実施し、女子大学としての存在意義がどう捉えられ、どのような特色あるカリキュラムを組み、高校生を女子大学へとリクルートしているのか、そのストラテジーを明らかにしようとしている。得られた結果を日本の女子大学と比較して検討することにより、日本の女子大学が見習うべき点を見つけると同時に、その特色や長所を明らかにし、今後の女子大学のあり方に示唆を得ようというものである。

これまでアメリカのワシントンD.C.にあるトリニティ・ワシントン大学（Trinity Washington University）を2016年3月に、同じくアメリカのマサチューセッツ州にあるスミス・カレッジ（Smith College）を2017年3月と同年11月の二度訪問し、インタビュー調査を行ってきた。トリニティ・ワシントン大学に関しては、1980年代には大きく志願者を減らし、大学のランキングも下げたが、学長の強いイニシアチヴの下、職業プログラムや夜間大学院を設けるなどして再建に取り組んでいる女子大学として注目した。スミス・カレッジについては、伝統があり今日でも高い威信を保つ女子大学であるとともに、新たな取り組みを実施し続けている女子大学として注目した。ここでは、スミス・カレッジでの調査を取り上げることとする。

上述のように、スミス・カレッジには二度の訪問調査を実施した。一度目の調査（2017年3月14-16日）に際しては、二名の大学関係者に話を伺うことができたが、この訪問時においては季節外れの強烈なブリザードにより、計画していたインタビュー調査を縮小せざるを得ず、当初予定の半分程度しか実行できなかった。よって、2107年11月にもう一度スミス・カレッジを訪問し、前回実行できなかったインタビュー調査を行うとともに、女子大学が抱える新たな課題（transgender-studentの受け入れ）についても聞き取り調査を行った。今回の報告においては、2017年3月に実施した一度目のインタビュー調査結果を報告する。

2. スミス・カレッジについて

調査対象者や調査の経緯を述べる前に、スミス・カレッジ（Smith College）について簡単に紹介をしておく。スミス・カレッジは、マサチューセッツ州にある女子大学であり、かつてセブンシスターズ（Seven Sisters）と呼ばれた歴史あるアメリカ北東部の7女子大学の一つである。設立順に、Mount Holyoke（1837）、Vassar（1861）、Wellesley

(1870)、Smith (1871)、Radcliffe (1879)、Barnard (1889) の7校であるが、Vassar は1969年に共学化し、Radcliffe は Harvard University に吸収・合併されたので、5大学が女子大学として存続し今日に至る。

スミス・カレッジの所在地はマサチューセッツ州西部に位置する Northampton 市で、州都のボストンから車で2時間ほどの距離にある。この街の人口は約 28,000 名（2017年現在）の、コネチカット川河畔にたたずむ風光明媚な小都市で、全米でも人気が高い街である。人口のうち白人（Hispanic と Latino を除く White）が 87% と非常に高い比率を占める（suburban stats. 2018）。近隣の街には女子大学である Mount Holyoke College や、共学のリベラルアーツ・カレッジとして有名な Amherst College などがあり、近くに位置する5大学で“Five College Consortium”を形成し、大学間には無料のシャトルバスが走っている。



図1. マサチューセッツ州の主たる都市

(出典：<https://www.drought.gov/drought/states/massachusetts>)

創設者は Sophia Smith である。彼女が受け継いだ父の遺産を基盤に、男子と同等の高いレベルの女子教育を提供するとの意思に基づき、Northampton の地に大学が創設された。よって、大学名は創設者 Sophia Smith の苗字に由来している。男性ではなく、女性創始者により、男性の大学と同等の教育を女子に施そうという強い意志によって誕生した女子大学である。スミス・カレッジの特徴として、大きな学寮を作らず、小規模な Cottage を幾つも作り、家族のように暮らし、街に溶け込むような居住システムをとった (Horowitz

¹ 上述の3校の他、University of Massachusetts Amherst, Hampshire College が加わった5大学がコンソーシアムを形成する。U. of Massachusetts のみが公立である。

1984)。これが今日の House System につながっている。後の高橋先生とのインタビューにも出てくるが、創設間もないこの女子大学を、日本女子大学の創始者・成瀬仁蔵が訪れ、学校づくりの参考にしたようである（日本女子大学学寮 100 年研究会 2007）。

初代の学長は Laureus Clark Seelye で、35 年間その地位にあり、スミスの強固な礎を築いた。6 代学長まで男性が続いたが、1975 年に初めて Jill Ker Conway 氏が学長に就任して以降、女性の学長が 5 代続いており（但し、学長代行を除く）、現在、11 代学長には Kathleen McCartney 氏が 2013 年から就任している。

次に、現在のスミス・カレッジの概要を、HP などのデータから述べる。スミスは、言うまでもなく全米でも有数の高いランクにある女子大学であり、学部（undergraduate）を中心とするリベラルアーツ・カレッジである。2017-2018 年の学生数は約 2600 名（学部のみ）で、学生は全米 48 州から集まっており、外国からの学生は 68 カ国にも及ぶ。カリキュラムでは 50 以上の領域から約 1,000 のコースが提供されており、非常に多様なカリキュラムが提供されている。学生のほとんどは大学内にある 37 の House に 4 年間住み、House は自治（self-governing）によって運営される。58 学問分野に 293 名の教員がおり、学生－教員比は 9：1 で、学生と教員の距離は近い。

授業料は \$ 52,120、House での生活費 \$17,520、その他の学生活動費 \$284 となっており、合計では \$ 69,924 にのぼる。日本円に換算すると、授業料だけで 550 万円、合計では実に 700 万円に及ぶ（2018-19 年入学者）。奨学金やスミスから Need-base（低所得者向け）の学資援助を受けている学生は、全体の 55% に及び、その範囲は \$792 ～ \$ 66,702 と幅広い。スミス以外からの援助を加えた Need-base の補助金（grant）の平均は \$ 45,279 となっている。

小規模であるが大学院も有しており、修士課程は 6 つのプログラム、博士課程は 1 プログラム（Social Work）を提供しており、在籍者は約 100 名で、ここは男女共学である。（以上、Smith College HP 掲載の資料およびデータと *Smith College 2016-17 Catalog*）。

1960 年代以前の威信はなくなったとも言われるが、それでも女子大学のトップに位置することは変わらない。中でもスミス（Smith）とウェルズリー（Wellesley）の威信は別格に高く、National Liberal Arts College ランキング 2018（U. S. News & World Report）において、ウェルズリー、スミスともに最上位に位置する。特にスミスは、工学（Engineering）系のプログラムを新設する、大きな寄付キャンペーンの成功させるなど、積極的な戦略を展開している。

² US News & World Report 社が提供している“National Liberal Arts Colleges 2018 ランキング”において、女子大学では Wellesley が 3 位タイ、Smith がこれに次ぐ 12 位タイに位置する。ちなみに、他の女子大学では Barnard とカリフォルニアの Scripps が 26 位タイ、Bryn Mawr 32 位、Mount Holyoke 36 位の順となっている。

3. 実施手続きと対象者

インタビュー調査の手続きおよび対象者は以下の通りである。調査の実施に際しては、2017年1月末、スミス・カレッジの Kathleen McCartney 学長にインタビュー調査のお願い文と調査内容の概要を郵送し、2月の終わりごろ President Cabinet の一人である Audrey Smith 入学担当副学長 (Vice President for Enrollment) 付きのスタッフ Susan Zachary 氏より受け入れ可能との返事を e-mail を通じていただいた。送付したインタビュー内容から、それに精通している入学担当副学長のスミス氏が適任という判断がなされ、彼女へのインタビューを行うこととなった。以後、e-mail を通じてスミス氏へのインタビュー調査の日程調整や質問内容の確認を行うとともに、“Financial Education” や “Entrepreneurial Spirit” などのプログラムを行っている The Jill Ker Conway Innovation & Entrepreneurship Center の責任者などへのインタビューも調整をしていただいた (但し、Conway Center でのインタビューは上述した天候悪化により中止となった)。

もう一人のインタビュー対象者は高橋温子上級講師 (Senior Lecturer) である。高橋先生へのインタビューにおいても述べられているが、先生は日本女子大学の家政学部を卒業後、アメリカ合衆国の University of Pennsylvania の大学院に進まれ、大学時代とは異なる異文化コミュニケーションを専攻された。その後、Smith College に職を得られ、現在、East Asian Languages & Literatures に属されている。高橋先生へのインタビューのアポイントメントは、McCartney 学長への調査依頼とは別に行った。アメリカと日本の女子大学の比較という意味で、日本人の教員から話を伺いたかったので、スミス・カレッジ HP 掲載の教員プロフィールから対象者を選ぶこととした。何人か日本の大学を卒業された日本人教員がおられたが、高橋先生は日本女子大学の出身であり、日米の女子大学の比較という点においても貴重なお話を伺うことができると考え、e-mail にてコンタクトをとった。幸いにも快くインタビューを受けてくださるとのお返事をいただいたので、それ以降、質問の骨子を送付し、インタビュー日時とともに調整を行った (学生へのインタビューも調整していただいたが、これも悪天候のために実施できなかった)。

双方ともに、事前にインタビューの概要を送付し、概ねそれに基づいてインタビューを実施した。質問の主な内容としては、スミス氏には学生をリクルートする際の戦略、女子大学の意義の説明、学生支援の方法や外国からの留学生の受入れ戦略などについて尋ね、高橋先生にはスミスの伝統や雰囲気、学生や教員の特徴、カリキュラム、学生生活、日米の女子大学の違いについて語ってもらった。

4. 本報告の作成手続き

インタビューにおいては、デジタルレコーダーを使用する許可をもらい、インタビュー内容を録音するとともに、内容を報告として掲載する許可を得た。録音データは、業者に

依頼して、それぞれ英語と日本語への文字起こしを行い、元原稿を作成した。その後、著者も録音を聞くとともにインタビューでのメモを見ながら、原稿のチェックを行った。スミス氏へのインタビュー原稿については、著者に時間がなかったこともあり、日本語への粗訳を依頼し、返ってきた日本語原稿を再び著者がメモなども参考に、大幅な加筆修正を行った。また、インタビューでは話のトピックが前後したり、繰り返し話されたりすることもあったこと、さらに読者に内容を分かりやすくするため、内容を変えない範囲で順番を変える、繰り返しを削除するなどして文章を調整した。さらに、脚注をつけ、詳細な内容を付け加えるとともに、話の内容を分かりやすくするよう工夫した（なお、インタビュー原稿では脚注に出典を書き込み、引用文献として最後にまとめてはいない）。特に高橋先生へのインタビューは内容が多岐にわたり、カリキュラムや履修の仕方を中心に確認したい点が幾つかあったため、安東が修正した原稿をメールでやり取りし、内容の確認を行ってもらった。厚かましくも、何度も原稿を送付したにもかかわらず、そのたび、高橋先生には迅速に丁寧なコメントを返していただいた。それでもなかなか理解できない内容もあり、もし誤りがあるとすれば著者の理解不足によるものである。

以下、Audrey Smith 副学長（Vice President for Enrollment）へのインタビュー、高橋温子先生（Senior Lecturer）へのインタビューの順で掲載する。

最後になったが、初めてのインタビュー調査の申し出を快く承諾していただき、気さくに応じてくださった Audrey Smith 氏と高橋温子先生に深く感謝いたします。高橋先生にはインタビュー後の原稿の手直しに至るまで、根気よく付き合ってくださいましたこと、お礼申し上げます。また、スミス・カレッジでのインタビュー調査を快諾くださり、質問内容に適任の Smith 氏を紹介していただいた McCartney 学長、さらに、訪問準備の段階から丁寧に情報をやり取りしていただくとともに、インタビュー当日の猛吹雪により大学が休校となったため、その後の日程や時間の調整を親切に粘り強く行っていただいたスタッフの Susan Zachary 氏にも、心よりお礼を申し上げる次第である。

引用・参考文献

Horowitz, Helen Lefkowitz 1984, *ALMA MATER: Design and Experience in the Women's Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s*, Alfred A. Knopf

日本女子大学学寮 100 年研究会 2007、『女子高等教育における学寮：日本女子大学学寮の 100 年』ドメス出版

Smith College 2016, *Smith College 2016-17 Catalog*

U.S.News & World Report 2017, *Best Colleges 2018 edition*, U.S.News & World Report

ネット資料

National Integrated Drought Information System

(<https://www.drought.gov/drought/states/massachusetts>)

Smith College HP

(<https://www.smith.edu/>) ……大学 HP については、“history”, “Smith at a glance”, “president”, “academics”, “student life” など様々なセクションを利用したが、ここにはすべては書き出してはいない。

Suburban Stats.

(<https://suburbanstats.org/population/massachusetts/how-many-people-live-in-northampton>)

※ネット資料については、2018年2月27-28日にアクセスして確認を行った。これは、この後のインタビュー報告の脚注にあるネット資料についても同様である。

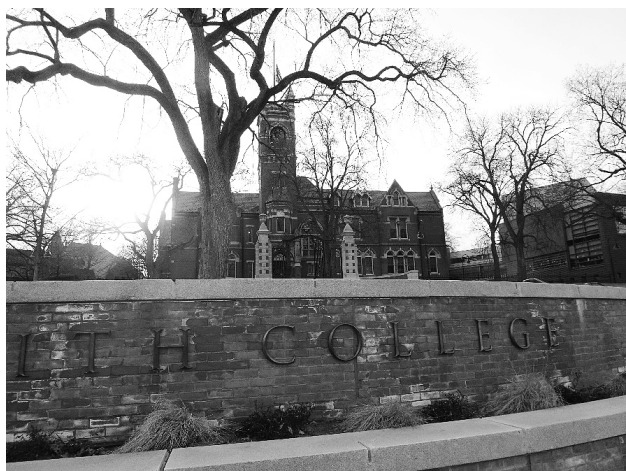


写真
College Hall of Smith College
(March 13, 2017)

写真
Botanical Garden から
Paradise Pond と Athletic Fields を望む
(March 13, 2017)

